

「日本儒学史」の著述に関する一考察：徳川時代から一九四五年まで

陳, 瑋芬
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/18168>

出版情報：中国哲学論集. 23, pp.66-86, 1997-10-30. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：



「日本儒学史」の著述に関する一考察

— 徳川時代から一九四五年まで —

陳 瑋 芬

はじめに

戦後しばらくして、日本における中国学の研究手法と研究姿勢を考え直してみようという試みが、研究者の自覚的な反省によってなされてきた。^① その個別的な研究の蓄積が豊かになっていく一方、七十年代に入ると、岩波書店より『日本思想大系』の刊行が始まり、各巻に収載される解説において、中国思想史家によって近世儒学史に対する実り多い発言がなされ、一拳に近世儒学思想史研究の水準が高められた。こうした状況を踏まえて、最近の研究では、各時代や地域において、その風土と合うように特殊化され変容してきた儒教と、古典儒教との格差、及びその特徴を見極める必要性に対して特に関心が払われている。^② 日本の儒学史研究においてもまた然りである。すなわち、近世と近代の知識人がそれぞれ描いた「日本儒学史」が一体いかなるものであったのかということを、改めて考察する必要があると思われる。その考察によって始めて、時代とともに変遷を遂げてきた日本における儒学研究への理解、つまり近世以降の知識人の言説上において、儒学というものがどのように学術的に再構成され、表現されてきたのかについての研究が可能になるのではないか。日本に伝わった儒学は、近世に至り「日本儒学史」として初めて体系化する作業が行われた。そこでは作者の学派的立場如何に関わらず、その問題意識は徳川社会の正統的教学である朱子学に向けられており、また日本の根源的な信仰である神道思想とも密接に関連していた。徳川期の漢学史論著は記録的断片的なコメントに終始し、統一的な体系を構築することが出来なかったが、明治に入ると、それはさらに学派的儒学史

として再構成された。明治という時代は日本における国家的規模での学術研究と教育制度の整備確立期であったため、その内容は君臣関係、天皇中心的な忠孝倫理に重きを置いており、また中国思想と日本思想との懸絶、日本思想の優秀性もかなり強調されていた。このように、近世と近代の知識人によって表象された「日本儒学史」の内容を検討すれば、彼らが批判的自覚的に受容し構造した儒教がいかなるものであったのか、当時の現実が儒学思想に何をもたらしたのかなどの理解も、一層深まるのではないかと思われる。そこで、本稿は、「日本儒学史」に関する研究がどのような形で進められたかを、主として徳川時代から一九四五年までにおいて「日本儒学史」などの体裁で通史的に概説された著作によりながら、検討していきたいと思う。

一 従来の研究

まず従来の「日本儒学史」関係の著作に対する研究について、若干考察しておきたいと思う。徳川幕末までの日本儒学史全般にわたって直接論及した研究論文は、まだ見当たらないが、明治維新以降の儒学史に関しては、三浦叶氏の「明治年間における日本漢学史の研究」があり、これが明治における日本儒学史を扱った唯一の研究だと思われる。⁽⁵⁾氏はその中で、日本儒学史の史的研究は又西洋文学史の影響を受けたことにより行われ、明治末年にいたってその成果は実ったと述べている。そして町田三郎氏も日本儒学史の研究に着手することは、「古典講習科」諸子の重要な役割であったと評価する。⁽⁶⁾また、近代の儒学史研究を近世との繋がりで捉えた東英寿氏は、伊地知季安の『漢学紀源』は明治における儒学史研究の基礎となっており、日本の儒学史研究史上に新たな道を切り開いたものだと言っている。⁽⁷⁾こういった論点を要約すると、日本儒学の「史的研究」は明治において、洋学の研究方法を学んだ古典講習科の出身者によって始められた。また彼らによって書かれた著作は、大なり小なり徳川時代の儒学を論じた書物に影響され、その論述を展開させたものであった。換言すれば、三浦氏がすでに指摘しているように、

明治以前において日本漢学史、或は日本の漢文学史を述べたものは、『本朝儒宗伝』・『皇朝儒臣伝』・『先哲叢談』のように儒者の列伝を記したもの、或は『日本詩紀』・『拙堂文話』などのように詩話、文話を述べたもの、又儒

学に関するものとして、『漢学紀源』・『学原』・『本朝学源浪華鈔』などのようなものがあるに過ぎず、これを史的に研究したいわゆる漢学史、或は漢文学史と称するようなものは出来ていない。それが明治時代になると、洋学にならない、ここに始めて文学の発生、或は文字の起りなどから説き起し、漢学の伝来、時代の特色、漢文化に関係の学校・文庫・学派・学者などを、体系を立てて組織的に、しかも時代的に研究するものが現れた。

ということとなろう。さて徳川初期から一九四五年までの「日本儒学史」を論述した書物がどれだけあったのかを調べてみると、三氏によって挙げられた著作の外に、数多くのものが世に現れていたことに気づく。しかも同時代の中国でも、同種の著書がいくつ出版されていたことに注目される。これらの著作を整理すると、徳川期の著作においては、「宗伝」・「淵源録」・「詩史」・「年表」など、いわゆる歴史的事実の縦糸と、「人物誌」・「文話」・「詩話」や「評論」の横糸とが織り合わされることによって、近世儒者の人物像を浮かび上がらせる素朴な歴史の織物が作り出されることとなる。明治になって、これらの書物の論述が発点とされ、時にタネ本として利用されることで、日本儒学の史的研究は着手されたのである。それ以降の知識人によって、或いは経学・或いは哲学・或いは文学など、ある一面についてその時代史的な変遷が述べられ、それが素朴な織物として加工されて個性のあるものになっていった。これを、いわゆる学術史的な「日本儒学史」研究の成立過程を明らかにするために、次に一九四五年まで世に出た日本儒学史に関する著作の初版年代（写本の場合は初写年代あるいは序跋に付けられた年記）と、作者や編者、出版社や刊行者を時代順に並べた上で跡づけてみることにする。

二 徳川期の「日本儒学史」

- ④ 寛文11年（一六七一）松下見林『本朝学源』（吉田権兵衛刊・『続属群書類従』）
- ⑤ 元禄3年（一六九〇）巨勢正純『本朝儒宗伝』三卷（西村市郎右衛門刊）
- ⑥ 元禄4年（一六九一）大高坂芝山『芝山南学伝』二卷（和泉屋市兵衛刊・『芝山会稿』）
- ⑦ 元禄年間（年代不明）大高坂芝山『海南諸儒伝』二卷

- ① 元禄11年（一六九八）真野時繩『本朝学源浪華鈔』七卷（聚文堂刊）
 ② 宝永4年（一七〇七）跡部良顯『日本儒学伝』一卷（写本・荻野文庫蔵）
 ③ 元文年間（年代不明）松崎白圭『儒学伝』
 ④ 寛延3年（一七五〇）河口静斎『斯文源流』一卷（王海堂刊・『温知叢書』三）
 ⑤ 宝暦年間（年代不明）岡田白駒『皇朝儒臣伝（日本儒臣伝）』一卷（武村甚兵衛刊）
 ⑥ 明和初年（年代不明）稻葉黙斎『先達遺事』一卷（河内屋八兵衛刊・『日本儒林叢書』三）
 ⑦ 明和3年（一七六六）稻葉黙斎『墨水一滴』一卷（河内屋八兵衛刊・『孤松全稿』卷五）
 ⑧ 明和8年（一七六九）江村北海『日本詩史』五卷（西村市郎右衛門刊・『岩波文庫』）
 ⑨ 明和年間（年代不明）河野恕斎『儒臣伝』一卷
 ⑩ 安永年間（年代不明）村松蘆溪『近世儒家人物誌』一卷
 ⑪ 安永年間（年代不明）永田觀鷺『儒林姓名録』一卷
 ⑫ 天明3年（一七八三）服部栗斎『先儒三子評』一卷（『隠居放言』卷一）
 ⑬ 天明6年（一七八六）亀井南冥『我昔詩集』一卷（写本・『日本儒林叢書』三）
 ⑭ 寛政11年（一七九九）那波魯堂『学問源流』一卷（泉本八兵衛刊・『日本文庫』六）
 ⑮ 文化6年（一八〇九）田畑吉正『儒職家系』（『改定史籍集覧』通記類十九）
 ⑯ 文化12年（一八一五）頼春水『師友志』一卷（写本・『春水遺稿』別録卷三）
 ⑰ 文化13年（一八一六）林秀直『淵源紀聞』三卷（写本・座春風文庫蔵）
 ⑱ 文化13年（一八一七）原念斎『先哲叢談』八卷（慶元堂・『東洋文庫』）
 ⑲ 文化年間（年代不明）山本北山『古今学派考』
 ⑳ 文政3年（一八二〇）市河寛斎『日本詩紀』五十三卷（『国書刊行会』第二期）
 ㉑ 文政10年（一八二七）東条耕『先哲叢談年表』（河内屋茂兵衛刊・崎門文庫蔵）
 ㉒ 文政12年（一八二九）齐藤拙堂『拙堂文話』（河内屋茂兵衛刊）

- ⑥ 文政年間（年代不明） 中村大明『近儒学脈考』二卷
- ⑦ 天保4年（一八三三） 伊地知季安『漢学紀源』四卷（写本・『新薩藩叢書』五）
- ⑧ 天保7年（一八三六） 広瀬淡窓『儒林評』（写本・『淡窓全集』中巻）
- ⑨ 天保7年（一八三六） 三浦親馨『会津藤樹学道統譜』（写本・『藤樹先生全集』巻四六）
- ⑩ 天保13年（一八四二） 大塚観瀾『日本道学淵源録』五巻（写本・碩水文庫藏）
- ⑪ 弘化元年（一八四四） 原徳斎『先哲像伝』（河内屋茂兵衛刊）
- ⑫ 弘化3年（一八四六） 細野要斎『尾張名家誌初編』二巻（田中寅亮刊・『日本儒林叢書』三）
- ⑬ 嘉永年間（年代不明） 中井乾斎『学流淵源』三巻
- ⑭ 安政3年（一八五六） 渡辺豫斎『吾学源流』一巻（写本・『日本儒林叢書』三）
- ⑮ 安政3年（一八五六） 青山拙斎『文苑遺談』三巻・続集一巻（鉄槍斎刊・『日本儒林叢書』三）⁽¹⁰⁾

これらの書物をさらに、出身地別や学派別に儒者の生涯を伝記体で書いた「宗伝・学伝」類、儒学の源流や学派の流れを遡ろうとする「源流録・学派考」類、宗派の枠を取り去って儒林人物の略伝を集める「人物誌・姓名録」類、儒家文人の学識を比較して論述を加える「評論」類、事実や逸話を寄せ集めた「詩話・文話」類、歴史全般を眺めようとする「詩史」類、そして儒学に関することを採録して年代順に並べて編纂している「年表」類の七種類に分けると、次のようになる。

(1) 「宗伝・学伝」類

巨勢正純『本朝儒宗伝』・大高坂芝山『芝山南学伝』と『海南諸儒伝』・跡部良頭『日本儒学伝』・松崎白圭『儒学伝』・岡田白駒『皇朝儒臣伝』・河野恕斎『儒臣伝』・田畑吉正『儒職家系』・三浦親馨『会津藤樹学道統譜』・細野要斎『尾張名家誌初編』。

(2) 「源流録・学派考」類

松下見林『本朝学源』・河口静斎『斯文源流』・那波魯堂『学問源流』・山本北山『古今学派考』・林秀直『淵源紀

聞・中村大明『近儒学脈考』・伊地知季安『漢学紀源』・大塚観瀾『日本道学淵源録』・中井乾斎『学流淵源』・渡辺豫斎『吾学源流』。

(3) 「人物誌・姓名録」類

村松蘆溪『近世儒家人物誌』・永田観鷺『儒林姓名録』・原念斎『先哲叢談』・原徳斎『先哲像伝』。

(4) 「評論」類

服部栗斎『先儒三子評』・広瀬淡窓『儒林評』。

(5) 「詩話・文話」類

稲葉黙斎『先達遺事』と『墨水一滴』・亀井南冥『我昔詩集』・頼春水『師友志』・斉藤拙堂『拙堂文話』・青山拙斎『文苑遺談』。

(6) 「詩史」類

江村北海『日本詩史』・市河寛斎『日本詩紀』。

(7) 「年表」類

東条耕『先哲叢談年表』。

「宗伝・学伝」類では、幕府に仕えた巨勢正純・田畑吉正・松崎白圭、そして古注を主とした儒医岡田白駒とその長男河野恕斎のものが主に儒職を務めた人の系譜を載せている。谷一斎に学んだ大高坂芝山の二書が土佐の儒者の伝記を収めているのに対し、『尾張名家誌初編』は堀杏庵を始めとした尾張出身の儒者の事跡を収録している。国学者でありながらも佐藤直方に朱子学を習った跡部良頭の『日本儒学伝』は三種の神器から徳川初期に亘って説かれているが、日本における儒教の発生は神々の働きにあると説明している。『会津藤樹学道統譜』は、調べた限りでは日本の陽明学派の学統を述べた唯一のものであり、しかも日本における陽明右派の人々しか取り上げていない。

「源流録・学派考」類には、最初に『本朝学源』が見られ、日本において周孔の道を奉じたことを論じている。鳩巢門下の高足である河口静斎の『斯文源流』は徳川の儒者の学説だけを記したものであるが、那波魯堂が病中において書いた『学問源流』は平安から徳川までにおける儒学の盛衰を考究しようとしている。「豈前人未発の卓見に非ず

や。……宋学の淵源を論ずるもの、この一書に過ぐるなし」と西村天囚に高く評価された『漢学紀源』⁽¹⁾は、日本漢学の起源、桂庵の学統をよくまとめたものであり、また桂庵の学を宣揚するために、五山文学の伝承を詳しく考証している。異学の禁の後に生まれ、共に崎門に属する林秀直・大塚観瀾・渡辺豫斎の著作は、その立場が全く一致するとは言えないものの、いずれも李退溪に対して特に尊敬を払い、当時逐年低下しつつあった朱子学の権威を回復しようと努力した。折衷学派である山本北山・中村大明・中井乾斎の著作は筆者未見であるが、おそらく「人物誌・姓名録」類の『先哲叢談』などと同じような学派的主張で、学派・学閥にとらわれず、できるだけ学者を網羅して、その行為を公平に記述した上で、彼らの長所を総合しようとする書物と推測される。

「評論」類としては、服部栗斎が闇斎・楊斎・鳩巢の思想と人物の特色を比較評論した『先儒三子評』があり、『先哲叢談』に触発された広瀬淡窓の『儒林評』も近世の儒者たちについて率直な、そして洞察に満ちた人物評を書いている。

「詩話・文話」類の多くは、著者の追懐の情を込めて、周囲の儒者や同派の諸子の略伝や言行を録して評を加えたものと見られる。例えば『我昔詩集』と『師友志』などがそれである。他には、唐津藩の儒官である稲葉默斎の二書は江戸初期の儒者と崎門派諸子の言行を録しており、『拙堂文話』には中国の古文家を論じる一方で、日本における古から徂徠、仁斎までの文を論評している。そして弘道館の総裁であった青山拙斎は、水戸の学風・藩儒とその修史事業を『文苑遺談』に書き込んでいる。「詩史」類と「年表」類とも歴史を記述する意図で作られている。著者が人を説得するに足りる客観性への挑戦を試みたことはその自序や凡例などから分かる。

こうして類を分けて検討した上で、次に再び全体のリストを一覧してみよう。すると、中国における伝承史の体裁の変遷が浮かび上がってくるのではなからうか。つまり、中国思想史において、知識人が己の思想的地位づけを正当化するため、いち早く強い道統意識によって伝承史の編纂に手を加えた。儒学の枠内でいえば、南宋・李元綱が「聖門事業図」を作り上げ、図表の形で道統の伝承を明らかにしようとした。後に朱子の『伊洛淵源録』も完成され、宋代理学の源流を記載しながら従前の簡略な図式から一歩進んで、人物の略伝と言葉とが加えられており、歴史書としての形式と内容を有するようになった。その後、宋端宜の『考亭淵源録』、周海門の『聖学宗伝』、孫夏峰の『理

学宗伝』などが道統論の根強い勢力の中で、宋から清に亘って数多く出された。引き続き完成された黄宗羲の『明儒学案』は、朱子学が完全に圧倒された様相を現実に忠実に描き、相異なる持ち味を持つ明代の儒者のそれぞれの特性を重んじて、客観的に位置づけようとした。ここまできて初めて、思想史をほぼあるがままに描き、冷静に評価しようとする公正な視点を持てるようになり、近代的哲学史研究に向かって一歩踏み出したと言えよう。この書は、梁啓超を始めとする学者たちによって、「中国における完善な学術史の始まり」¹²という、高い評価を与えられている。

ここにいわば「伝道図」↓「淵源録・宗伝・学譜」↓「学案」といった系譜の体裁が変わりつつ、整えられてきた軌跡を辿ってみた。これをまとめてみると、道統論が提起されることによって、「道統の伝」を描いた系譜が作り上げられた。そして、道統論の衰退に伴い儒林伝が現れ、ついに『学案』のようなものが生み出され、諸儒の史的研究が起こつてくるというように結論づけることができる¹³。徳川期において、家康以来朱子学をもって幕府の教学の基礎と認めたため、宋明理学に強く影響を受けた当時の知識人も「道統」を盛んに議論していた。様々な学派が盛んに起こり、論争もかなり多彩を極めた。羅山を始めとする幕府の文教を支える大学頭の系統と、閩齋を代表とする崎門派、そして蕃山の王学左派と淵岡山の王学右派などは、それぞれが自分を「道」の伝承者・保持者であると自認し、その構築した学問の系統・師承の関係もかなり違っていた。¹⁴一方、道統に反対する堀川学派と古文辞学派の人々は、道統について次々と疑問を投げかけた。このような活況が徳川前・中期に亘って続いたが、寛政年間に幕府は「異学の禁」を実施し、朱子学によって思想の統制を計ろうとした。しかしこれは必ずしも成功せず、程朱・陸王・仁斎・徂徠の学派を平等な視点から捉え、広い歴史的視野から思想の流れと人物の資質を見ようとする折衷派の学風が確立され、学問的体系的にその主張を顕著にしていた。こうして道統を自由に眺め得る視点を獲得し、近世日本の儒者を公平に叙述した書物がいくつか現れた。換言すれば、徳川後期になると、知識人はその書かれる対象への客観的認識と学派の区別を越えての公平な態度に向かつて行き、この姿勢は具体的に彼らの著述に現れている。むしろその論述の仕方は未だ整然としておらず、かつ個別的な書誌・伝記・思想・批判などを、思想史の流れの中で把握し位置づけることが出来ないままに、幕府の終焉を迎えることになった訳であるが、「日本儒学史」の編纂はここにきて、ターニング・ポイントに立たされたと思われる。それら「儒林伝」に当たるものは明治になると、西洋流の方法論をよく

取り入れながら体系的に整えられ、田口卯吉・井上哲次郎・久保天随らによって学術史としての「日本儒学史」と称されるものがようやく出現し、新たな展開を遂げた。

三 明治期の「日本儒学史」

既に見てきたように、日本儒学史に関する史的研究は、明治において新たに生み出された学問であり、それは「古典講習科」の師弟の功績であるとされる。ここに明治期の書物を年代順にまとめたリストを見てみよう。

明治10	(一八七七)	田口卯吉	『日本開化小史』(私家版・『岩波文庫』)
明治13	(一八八〇)	松村操	『近世先哲叢談』二卷・続二卷(写本)
明治14	(一八八一)	島田篁村	『与黎菴斎書』(『篁村遺稿』)
明治17	(一八八四)	東条耕	『先哲叢談統編』十二卷(慶元堂)
明治18	(一八八五)	黄遵憲	『日本雜事詩』(広西梧州・同文館)
明治20	(一八八七)	黄遵憲	『日本国志』(広東羊城・富文齋)
明治22	(一八八九)	島田篁村	『本朝儒学源流考』(『斯文学会雜誌』第五・十三号)
明治24	(一八九一)	黒木安雄	『本邦文学之由来』(進歩館)
〃	(一八九一)	岡田正之	『近江奈良朝の漢文学』(養徳社『東洋文庫』)
明治26	(一八九三)	内藤燦聚	『近世大儒列伝』(博文館)
明治27	(一八九四)	安井小太郎	『本邦儒学史』(富山房)
〃	(一八九四)	重野成斎	『日本儒学派略系』(『東洋哲学』第一編九〇一—一〇二)
明治30	(一八九七)	内藤湖南	『近世文学史論(関西文運論)』(政教社・朝日新聞社)
〃	(一九九七)	重野成斎	『本邦漢文沿革史』(『重野博士史学論文集』)

明治 31	(一八九八)	高瀬代次郎	『日本之陽明学』(榎原文盛堂)
〃	(一八九八)	楠本碩水	『崎門学脈系譜』一卷(晴心堂)
明治 33	(一九〇〇)	井上哲次郎	『日本陽明学派之哲学』(富山房)
明治 35	(一九〇二)	井上哲次郎	『日本古学派之哲学』(富山房)
〃	(一九〇二)	法貴慶次郎	『閩齋学派之学説』
明治 37	(一九〇四)	久保天隨	『日本儒学史』(博文館)
明治 38	(一九〇五)	井上哲次郎	『日本朱子学派之哲学』(富山房)
明治 39	(一九〇六)	上村観光	『五山文学小史』(裳華房)
明治 40	(一九〇七)	久保天隨	『近世儒学史』(博文館)
明治 41	(一九〇八)	川田鉄彌	『日本程朱学の源流』(高千穂学校『浦田先生全集』)
明治 42	(一九〇九)	西村天囚	『日本宋学史』(梁江堂書店)
明治 43	(一九一〇)	内野五郎三	『近世儒林年表』(松雲堂)
明治 44	(一九一一)	西村天囚	『学界の偉人』(大阪朝日新聞社)
明治 45	(一九一二)	上村観光	『五山詩僧伝』(明治書院) ¹⁵⁾

これらの書物は町田三郎氏によって、学術史の記述(『与藜純齋書』・『本邦文学之由来』・『本邦儒学史』・『近世文学史論』・『日本儒学史』)、学派の記述(朱子学派『閩齋学派之学説』・『日本朱子学派之哲学』・『五山文学小史』・『日本程朱学の源流』・『日本宋学史』)、陽明学派(『日本之陽明学』・『日本陽明学派之哲学』)、古学派(『日本古学派之哲学』)、伝記的な記述(『近世先哲叢談』)と分類されている。三浦叶氏はさらに「伝記的な記述」の項に『先哲叢談統編』、『近世大儒列伝』、そして『五山詩僧伝』を加え、また「年表」という項目を立て、『近世儒林年表』を挙げている。

しかし、果たしてすでに論じられているように、伝記体で書かれた『近世先哲叢談』を除いて、千五百字弱の島田

篁村の「与黎純斎書」⁽¹⁶⁾は、日本における儒学史研究の嚆矢であるだろうか。そこで、「与黎純斎書」より早い時期に現れた『日本開化小史』と清朝の挙人である黄遵憲によつて書かれた『日本国志』に注目してみたい。厳密に言えば、この二書は「日本儒学史」⁽¹⁷⁾を著すつもりで作られたものではなく、その一部の結果として「儒学史」を述べるものとなっている。つまり、前者は「日本文化史」の記述を目指したものであり、後者は日本の歴史文化一般を真面目に紹介しようとしたものである。

『日本開化小史』は維新以前における社会世代の変遷を体系的に述べながらも、漢学を一つの学問としてその発展の軌跡を描いている。特に「徳川氏治世の間に現はれたる開化の現像」という章で、徳川時代が三期に分けられ、朱子学・陽明学・復古学・文章家・折衷学の起源とその盛衰とが、時代思潮として眺められている。田口卯吉の、西洋の自由・立憲主義などの新思想を十分に消化した上で伝統を反省し、その因果関係を説明しようとする努力がよく現れており、岩波文庫版の解説者嘉治隆一は「維新日本最初の文明史」、「典型的な市民史論」と高く評価している。

ところで、この書が出版された明治十年に、黄遵憲が参贊官として、初任の駐日公使何如璋と共に日本に着任した。中国を危機から救おうとする強い愛国心から、彼は広く東京の文人と交際の輪を作り、日本に関する資料を収集することに努めた。来日後二年あまりでまず『日本雜事詩』を書き上げ、ついで『日本国志』⁽¹⁸⁾の執筆に取りかかったが、アメリカへ転任したため、その完成は明治二十年となった。その学術志は、「日本における学術の利弊を総論」することを意図したもので、その「漢学」篇では、漢籍の伝来から明治十四年の「斯文学会」の成立までの儒学史を述べている。特に徳川期について、程朱学者・陽明学者・古学者・「自ら一幟を樹」つ者・史学者など四百人あまりの略歴・学説を概説しており、彼らの著書に関しては、改めて「経説書目」という欄で述べている。その結論では、功利・利己主義者らが「声氣を驚せ、排擠を好」むという日本儒学の弊を指摘し、孝悌忠信といった倫理や道徳を重要視し、実際に実践しなければならぬと呼びかけている。

「与黎純斎書」は何如璋・黄遵憲に続いて駐日公使として来日した黎庶昌に対して、その初見の挨拶として呈した書簡である。これは中国公使に日本の学術を紹介するといった社交的な側面もあったため、その内容では日本儒学史にも触れているが、上代と徳川期の二期を略述しているに止まる。島田はさらにこれを校正して、「本朝儒学源流考」

という題で公表した。それには王朝（応神天皇→安徳天皇）・武家（文治→慶長）・そして徳川（元和→慶応）の各時代の略が要領よく説かれている。島田の同僚である重野成斎の「日本儒学派略図」も「東洋哲学」に連載されているが、簡単な粗描に過ぎないものだと思う。しかし彼らに学んだ黒木安雄を始めとする古典講習科の学生は、明治二十年代半ばから次々と儒学の立場から統一的な体系を構築しようとして「日本儒学史」・「漢学史」⁽¹⁹⁾の時代史的な研究を公表した。黒木は在学中に書いた「日本文学志」を修補し、島田の序を得て『本邦文学之由来』と改題して上梓し、その同窓である安井小太郎も『支那学』誌上に「本邦儒学史」を発表した。その中で彼は伝注学（応神天皇→元祿）・正経学（元祿→近時）とに分けて、前者は模倣の時代、後者は消化して独自の儒学を醸成した時代と規定している。この時代区分は後の色々な儒学史などのそれとは異なっているが、経学者としての著者の秀れた識見を窺うことができる。

次に明治三十年代に世に出て、今日まで益するところの多い内藤湖南の『近世文学史論』、久保天随の『日本儒学史』と『近世儒学史』、そして徳川儒学史における主要三派の消息を追求しようとした井上哲次郎の三部作について検討したいと思う。『近世文学史論』は儒学・医学・国学の三分野から成り、儒学ではまず藤原惺窩以前において宋学の隆盛を導いた学者・学僧を簡単にまとめ、本論では惺窩・羅山から始まる徳川期の儒者の流れを簡明に論述し、併せて學術的地域的な展開の様相をも記述する。これによって徳川期の儒学の大概を知ることができるが、しかし何分にも小冊子であって具体的な論述はない。この点を補うものが井上の三部作であった。ここでは綿密な書誌的調査と資料蒐集を基礎に、記述の形式を整え、論述も性行・思想・著述・後継者・諸家の批評といった筋の通った学案的なものとなっている。⁽²¹⁾内藤と井上によって、徳川期における朱子・陽明・古学といった主要三派に関する研究は一応まとめ上げられたが、日本儒学史全般をカバーして論述したものではなかった。彼らによって言及されなかった古代・中世の儒学を述べたのは、天随の二書である。『日本儒学史』では上世期の「漢学講習時代」及び中世期の「宋学輸入時代（五山・戦国）」を論じているが、近世の「諸学競起時代」は『近世儒学史』の方に譲っている。つまり天随は日本儒学の通史を、とりわけ漢宋二学の輸入・講習・弘布の次第について論述し、従来の学界の断代史的研究の欠を補ったのである。⁽²²⁾

四十年代になると、それまで未だ十分に説かれていなかった朱子学の伝来と伝播が、『日本宋学史』によって集成されたのに加えて、『近世儒林年表』も現れた。しかし、これら日本儒学史に関する研究は、実に国文学史の研究がようやく行われようとしていた風潮と時を同じくしていた。時代の思潮は国文学研究の機運を来たし、国文学史も四十種以上のものが作られたのに対し、儒学史の方はだいたい哲学方面を中心に行っている。文学を主としたものに関しては、五山文学を取扱った上村観光の二書があるに過ぎない。但し著作にはなっていないが、明治の末に東大において、芳賀矢一が日本漢文学史を講義していることも知られる。それは後に岡田正之の『日本漢文学史』によって継承された。⁽²³⁾

以上の書物に現れたイデオロギーから考えて、そこにも明治という時代の影が、覆うべくもなく刻印されざるを得なかったことが分かる。つまり、「日本儒学史」を編纂した人々には、歴史学者・国文学者・漢学者など、伝統的な学問を専攻している者が多かったが、彼らは西洋の学術方法論を身に付けようとする一方で、洋学からの批判に対して反駁するという形で自らの正統性を主張しえなくなった。そこで彼らは何らかの形で「東洋」という包括的な文化概念に対して解体的批判を下し、儒学を含む文化に対する理解も日本の固有性に重きを置いている。よって、当時における国民教育の根幹的理念として重要な位置を占めた「国民道德」を「民族精神の顕現」とする視点から、日本独自の儒学を構成していった。そういう国粹主義的心情への配慮が様々な形で現れ、「日本儒学史」の編纂に心掛けたのも、日本は儒学を受容したのではなく、日本固有のものの価値を一層高める触媒として儒学を利用したという考えがあったからだと思われる。なおその内容を検討すると、個々の著述の中味に立ち入った研究に乏しいため、思想の把握が表面的に終わっているが、どの学派にもみな適度なスタンスを取ろうとしたことが、過去の儒者に対する適度な距離の置き方と公平な叙述を可能にしている。確かにそれら体系的に儒学史を描き出した書物は、後の日本儒学研究に一つの確固たる基礎を提供した。しかし折衷学派や考証学派に関する特説や、地方の漢学（南学・京学・大内文学・菊池文学・薩摩文学など）に限って深く研究したものが現れるのには、次の時代を待たなければならなかった。

四 大正期から一九四五年までの「日本儒学史」

次に大正期から昭和二十年までに出版された著作のリストを見てみよう。

- | | | |
|--------------|-------|---------------------------|
| 大正 4 (一九一五) | 岩橋遵成 | 『大日本倫理発展史』(目黒書店) |
| 大正 7 (一九一八) | 村松志孝 | 『近世儒家人物誌』(顕光閣) |
| 大正 11 (一九二一) | 安井小太郎 | 『日本儒学年表』(斯文会) |
| 〃 (一九二一) | 渡俊治 | 『儒家小誌』(文求堂) |
| 大正 13 (一九二三) | 内藤湖南 | 『平安朝時代の漢文学』(弘文堂『日本文化史研究』) |
| 大正 14 (一九二四) | 岩橋遵成 | 『日本儒教概説』(宝文館) |
| 大正 15 (一九二五) | 武藤長平 | 『西南文運史論』(岡書院) |
| 大正 15 (一九二五) | 内野皎亭 | 『近世儒林年表』(松雲堂書店) |
| 昭和 2 (一九二七) | 岩橋遵成 | 『近世日本儒学史』(宝文館) |
| 昭和 3 (一九二八) | 芳賀矢一 | 『日本漢文学史』(富山房『国語と国民性』合刊本) |
| 〃 (一九二八) | 竹林貫一 | 『漢学者伝記集成』(関書院) |
| 昭和 4 (一九二九) | 岡田正之 | 『日本漢文学史』(共立社) |
| 昭和 7 (一九三二) | 足利衍述 | 『鎌倉室町時代之儒教』(日本古典全集刊行会) |
| 〃 (一九三二) | 小野機太郎 | 『日本漢文学史』(岩波講座『日本文学』十月刊) |
| 昭和 8 (一九三三) | 山岸徳平 | 『日本漢文学史』一(共立社『漢文学講座』第二卷) |
| 昭和 9 (一九三四) | 岡井慎吾 | 『日本漢字学史』(明治書院) |
| 〃 (一九三四) | 寺石正路 | 『南学史』(富山房) |
| 〃 (一九三四) | 西島醇 | 『儒林源流』(東洋図書刊行会) |

- 昭和10 (一九三五) 糸賀国次郎 『海南朱子学発達の研究』(成美堂書店)
- 〃 (一九三五) 小川貫道 『漢学者伝記及著述集覧』(関書院)
- 昭和13 (一九三八) 牧野謙次郎 『日本漢学史』(世界堂書店)
- 〃 (一九三八) 関儀一郎 『儒林雜纂』(東洋図書刊行会)
- 昭和14 (一九三九) 万羽正明 『日本儒教論』(三笠書房『日本歴史叢書』十八)
- 昭和15 (一九四〇) 斯文会 『近代日本の儒学』(岩波書店)
- 昭和16 (一九四一) 高田真治 『日本儒学史』(地人書館)
- 〃 (一九四一) 北村澤吉 『五山文学史稿』(富山房)
- 〃 (一九四一) 関儀一郎 『近世漢学者著述目録大成』(東洋図書刊行会)
- 昭和17 (一九四二) 石濱純太郎 『浪華儒林伝』(全国書房)
- 〃 (一九四二) 関儀一郎 『近世儒家史料』(井田書店)
- 昭和18 (一九四三) 高須芳次郎 『近世日本儒学史』(越後屋書房)
- 〃 (一九四三) 安西安周 『日本儒医研究』(青史社)
- 〃 (一九四三) 斎藤恵太郎 『近世儒林編年史』(全国書房)
- 昭和19 (一九四四) 大江文城 『本邦儒学史論考』(全国書房)⁽²⁵⁾
- 昭和年間 (年代不明) 万羽正明 『日本儒学史』
- 昭和年間 (年代不明) 加藤仁平 『藤樹学の発展とその意義』

明治末年から大正年間にかけての中国における社会や思想の急激な変化は、日本の知識人に学問の方法に対する再検討を迫ってきた。清朝の崩壊、共和政体の出現という未曾有の事件に直面して、彼らの儒学の前途に対する不安と困惑はこの頃色濃く現れており、それぞれ異なった反応として現れた。具体的に例を挙げれば、東大や「斯文会」の人々が国家理念と密着した形で儒学勢力の挽回を図りつつあり、服部宇之吉・宇野哲人らによって孔子教や日本儒教

が盛んに提唱され、革命是認論は孔子の真意ではない、孔子の大義名分論は日本に伝わって輝きを増したと論じられた。その一方、京大や「支那学社」の人々はどういった儒教及び經典に対する信仰的態度を拒否して、小島祐馬・青木正児らは儒学を客観的な対象として社会史的に分析し、国家に対する自立的価値を主張し始めた。しかし、「日本儒学史」を編纂した人々の殆どは、やはり安易に服部らと同じ立場を取っていた。例えば『大日本倫理発展史』・『日本儒教概説』・『日本儒教論』などには、儒学の起源・変遷を述べながら日本文明の優秀性を強調し、日本は皇室を中心とした一つの共同体であって、日本人の「勤王心」こそが、日本をして今日の強国を築いた一因だと論じられている。牧野謙次郎が早稲田大学で行った講義に基づいて作られた『日本漢学史』は、時代を四期（上古・平安朝・鎌倉・織豊・徳川・明治）に分ける。その草稿が「日本漢学文化史」と題されていたように、内容は文教・政経など日本文化と儒教との関係を体系的によく説いており、その学説史あるいは列伝的思想史という形を意識的に排して、思潮史的記述を取っている点がかかなり好評を博したのだが、それでもその序説に国体の尊厳を唱えており、当時のナショナリズムの滔々たる潮流に押し流されていたのである。

ところで、この時期に新たな分野の研究も着手された。例えば日本漢文学の本格的な研究として小野機太郎と岡田正之との『日本漢文学史』があり、『日本漢字学史』のような漢字に関する研究書も新たに現れた。なお『南学史』・『海南朱子学発達の研究』・『藤樹学の発展とその意義』など、地域や学派を中心にその学としての発達史を追究し意味付けようとするものや、伝記・著作を集め編集した辞書が増えつつあったことにも注目される。辞書には簡単に字号・籍貫・生没年を知るものとしては『儒家小誌』と『近世儒家人物誌』があり、個人の伝記を知るものとしては『漢学者伝記集成』があり、著書を集大成したものには『漢学者伝記及著述集覧』と関儀一郎の三書があり、そして『近世日本の儒学』には徳川時代の儒学に関する諸家の論文がまとめられている。年表類も『日本儒学年表』と『近世儒林年表』が挙げられるが、脱略が多いのが目だつ。また唯一編年体を取って書かれた『近世儒林編年史』の外に今ひとつ注目すべき著作は、日本における儒学と医学との関係を始めて考察したものだと思われる『日本儒医研究』である。その中には、三浦梅園・亀井南冥のような、一般には儒者として知られた者についてその医学との関わりを論じ、永富独嘯庵・長田徳本のような医者として伝えられた者については、もっぱらその儒学との関わりを述べ、そ

して岡田華陽・伊藤鹿里のような儒・医ともにあまり有名でない者に関しては、儒論・医説を併叙している。

大正以降における「日本儒学史」に関する著作の殆どは、学派史を論じたものを除いて、上代から明治・大正にわたって時代順に論述しているが、全体として概論風であって、主として儒者文人の伝記を中心に述べている。内容から言えば、儒教はもともと中国に起こったものだが、日本に移植されてから日本的色彩が加味されており、日本の儒教こそがもともと孔子の真意を得たものであるという考えから、これまでの漢学者の学説を称賛したり、批判するのである。それで、これらの著述は論理学に対する関心はいたって乏しく、倫理学に対する関心が強いものになっているように思われる。これもその頃の社会思潮を反映したものであろう。むろん先に述べたように、細分化した分類集成するという二つの傾向は、それまでの研究よりも前進したと言えるものの、当時における「支那哲学史」の著作に現れたような儒教に対する客観的態度、そして護教主義から離れて儒学の学問的自立を志向する態度の⁽²⁶⁾見られないことは遺憾である。

おわりに

以上、従来の研究を踏まえながら、徳川期の初めから一九四五年までというかなり長い時期を三つに分けて、日本の知識人によって表象された「日本儒学史」を顧みることを試みた。儒学は外来思想として日本社会に受容され、各時代の知識人は「日本儒学史」という形でその受容の歴史を回顧し叙述した。そのいわゆる歴史的表象化の作業において日本の儒学史は意味ある一頁として形成され、またそこに記された日本の儒学史のあり方を通して彼らの歴史意識を問うことができると思われる。換言すれば、徳川期の著作において、神道と儒教は本来的に一致し原理的に互いに包摂し合うという考えによって、日本における儒学の発生と伝承は最初に構成された。明治期の著作においては、日本における哲学思想の史的発展を組織的に叙述し評論する意図で、国家主義的発想を帯びながら「日本独自の儒学」として読み出された。そして大正から一九四五年までの著作において、儒学は国家の体制イデオロギーに組み込まれたため、形式には近代的方法を取っているとあるが、内容的にはやはり近代的学問の特徴である対象の客観

化、資料に対する批判的精神を欠いていたと言える。もちろん、知識人らが日本の儒学史解明に立ち向かった内的な必然性や、その史料の吟味や編纂の方法等々の問題については、さらに考察していかなければならないが、その個々の分析と論評に具体的に立ち入ることは別稿に譲ることにして、本稿ではその歴史的な登場の概観を述べるに止めた。

〔注〕

- (1) 日本近世儒学史研究は、周知のように丸山真男氏(『日本政治思想史研究』、東京大学出版社、一九五二年)の研究を土台にして開始され、その後の研究はおおむね丸山説を踏まえながら、丸山説をどう克服するかということが中心課題として展開され、その過程で、朱子学が近世社会に必ずしも適合せず、不適合な面が多々あることが明らかにされた。
- (2) 例えば、尾藤正英氏は渡辺浩氏著『近世日本社会と宋学』に対する書評の中で、「日本的な『主體的自我』のあり方を問う」(『歴史評論』四四〇号、一九八六年)ことが大切であると主張しているし、宮城公子氏も幕末社会が儒学の大衆化された社会であると規定した上で、儒者の主体性に視点を据えた諸研究を精力的に展開している(『幕末儒学史の視点』、『日本史研究』二二二号)。
- (3) 日本の知識人あるいは漢学者に限らず、国学者または中国の知識人なども考察対象にされている。
- (4) 専門研究は見当たらないが、論文や序文や緒言の中にこの辺の研究を触れたものはいくつかある。たとえば、阿部吉雄氏の「江戸初期の儒学研究序説」(『東京支那学報』第一号)、東英寿氏の「伊地知季安の『漢学紀源』について」(『鹿児島大学文科報告』第三十二号、一九九六年)と「伊地知季安と佐藤一齋——桂菴禪師碑銘作成過程に著目して」(九州大学『中国文学論集』第二十五号、一九九七年)、久保天随『日本儒学史』(博文館、一九〇四年)の自序、西村天囚『日本宋学史』(梁江堂書店、一九〇九年)の緒言、源了圓・前田勉編『先哲叢談』(平凡社東洋文庫、一九九四年)の解説などがある。
- (5) 「明治年間における日本漢学史の研究」は『斯文』五三、五四合併号(一九六八年)に収めている。その他に、町田三郎氏の「東京大学『古典講習科』の人々」(九州大学『哲学年報』第五十一輯、一九九二年)、「明治的漢学」(張立文、町田三郎主編『伝統文化と東亜社会』、中国人民大学出版社、一九九二年)、「井上哲次郎ノート——漢学三部作を中心にして」(『中村璋八教授古稀記念東洋学論集』、汲古書院、一九九六年)、「久保天随の学術成就——以漢学史研究為探討重點」(成功大学『第一届台湾儒学研究國際學術研討會論文集』、一九九七年)、大島晃氏の「井上哲次郎の『東洋哲学史』研究と『日本陽明学派之哲学』」(二松学舎大学『陽明学』第九号、一九九七年)などにも、日本儒学史の書物に関する評が含まれている。

- (6) 町田三郎氏「東京大学『古典講習科』の人々」(九州大学『哲学年報』第五十一輯七七ページ、一九九二年) 参照。
- (7) 東英寿氏「伊地知季安の『漢学紀源』について」(『鹿児島大学文科報告』第三十二号ページ一六〇一二二)『漢学起源』の与えた影響、(一九九六年) 参照。
- (8) 本稿の第三章に考察対象となる黄遵憲の『日本雜事詩』と『日本国志』卷三十二「學術」がある。
- (9) 本書は大家観瀾によって集められ、最初に『本朝道学淵源録』と名付けられた。また『本朝儒先録』及び別録が出された。これらは後に千手旭山と共に校補され『日本道学淵源録』として一部にまとめられた。さらに名を『扶桑儒海』と改め、月田蒙斎に伝えたが、上梓するに及ばなかった。その後楠本端山、碩水がこれを増補した上で、さらに補録するもの二巻、別録二巻を加え、昭和八年に、その門人岡直義より出版された。
- (10) ここに学系の区分が必要であると思うので、次のようにそれぞれの符号で区別する——林家学系①、闇斎学系②、陽明学系③、国学系④、古学系⑤、折衷学系⑥。
- なお、リストに挙げている『海南諸儒伝』・『儒学伝』・『儒臣伝』・『近世儒家人物誌』・『儒林姓名録』・『古今学派考』・『近儒学派考』・『学流淵源』筆者未見であるが、近藤春雄の『日本漢文学大事典』(明治書院)と関儀一郎の『近世漢学者著述目録集成』(東洋図書刊行会)に書名が収録されているものである。
- (11) 『漢学紀源』は全四巻(歴史図書社版の『新薩藩叢書』第五巻所収録の『漢学紀源』は、その四巻の後に「巻五・付録 桂庵 禅师碑銘建方一件」がある)であり、三十七項目から構成されている。この著は西村天因『日本宋学史』の緒言に評価されただけではなく、久保天随『日本儒学史』の自序にもかなり称揚された。その儒学研究史における位置づけに関しては、註四に挙げている東英寿氏の論文に詳細に考察されている。
- (12) 梁啓超『中国近三百年學術史』七六―七八ページ(上海民志書店、一九二九年)、その後、錢穆の『中国史学史名著』二八五―三一七ページ(台北三民書局、一九七三年)などにもその見解が示されている。
- (13) 荒木見悟氏の「道統論の衰退と新儒林伝の展開」(久留米大学『比較文化研究所紀要』七、一九八八年、改訂稿は『明清思想論考』に収録、研文出版、一九九二年)ではこの論点を提起し、詳しく考察している。道統論の消長については、望月高明氏の「吳康斎と『伊洛淵源録』」(『陽明学』第四号、一九九一年)と小島毅氏の「明代福建朱子学物語」(『中国近世における礼の言説』、東京大学出版会、一九九六年)などにも論述されている。
- (14) 各学派の道統論に関しては、今後稿を改めて述べるつもりである。
- (15) 『闇斎学派之学説』は筆者未見だが、三浦氏と町田氏の前掲文による。

- (16) 「与黎範齋書」は明治十四年に島田篁村から黎庶昌にあての書簡であり、その中に日本儒学史が説かれている。後にこれを校正したものが「本朝儒学源流考」という題で『斯文学会雑誌』の第五・第十三号の二回にわたって公表した。
- (17) その著述の背景については、『日本開化小史』の「解説」と寛久美子氏の「黄遵憲と宮島誠一郎——日・清政府の官僚文人交遊の一軌跡」(京都大学『中国文学報』第五十号、一九九五年)を参考にされたい。
- (18) 『日本国志』の黄遵憲の自序によると、取り扱った書物は二百余点にも及ぶ。その巻三十二では、「日本之學術、先儒而後墨、余故総論其利弊、如此作學術志。一漢学、二西学、三文字、四学制。」と述べられている。なお、ここに挙げられている年代は主として尤炳圻の「黄公度先生年譜」(文化学社刊の『人境廬詩草』の巻頭に付載)、錢萼孫の「黄公度年譜」(『人境廬詩草箋注』の巻首に付載され、尤氏の年譜を大幅に補正)、沃丘仲子の『近代名人小伝』と、梁啓超の『嘉応黄先生墓誌銘』などに基づいて確認している。その史学観に関しては、盛邦和の『黄遵憲史学研究』(江蘇古籍出版社・一九八七年)、麦若鵬の『黄遵憲伝』(古典文学出版社・一九五七年)、Noriko Kamachiの「REFORM IN CHINA Huang Tsun-hsien and the Japanese Model」(Council on East Asian Studies, Harvard University Press, 1981)を参照した。
- (19) 「日本文学史」は上古以来の文学沿革の概観を述べ、初めに儒、次に仏、終わりに洋学を説いたもので、体裁は記事本末に習い、また論断を加えたものであったというが、刊行された『本邦文学之由来』は、文学とはいっているものの、上古・中古の儒学篇しか述べていない。島田の論文と比べると、黒木のものは学問的には詳密に述べられているが、島田のものは武家・徳川時代にまで論及している点で、平安時代までしか説いてない黒木の『本邦文学之由来』の欠を補っている。
- (20) 「本邦儒学史」はまず総論では儒の字義、孔子を儒学の祖とすることなどから説き起こし、中国周初から隋唐の頃に至るまでの沿革を略述し、その後日本の儒学を徳川時代まで概説している。
- (21) そこから、中国より二百年近くも遅れて、その学術史と称されるような「日本儒学史」がようやく出現したと言えよう。
- (22) 町田三郎氏の「久保天随の学術成就——以漢学史研究為探討重點」(成功大学『第一届台湾儒学研究國際學術研討會論文集』、一九九七年)を参照した。
- (24) 芳賀の講義録は昭和三年に遺稿として刊行された。改訂版の『日本漢文学史』の序に、長沢規矩也は「東大に於ける『日本漢文学史』講義は、故芳賀矢一博士が創められ、先師(岡田正之)が之を継承されたものであるが、先師の没後は、之を継ぐ人がない」と記している。
- (24) 明治期の著作で地方の儒学を中心に論じているものは、内藤湖南による旧名「関西文運論」の『近世文学史論』が関西の文学を述べているだけである。

(25) 『日本儒学史』(万羽正明)と『藤樹学の発展とその意義』は筆者未見だが、高田真治の『日本儒学史』に「参考文献」として挙げている。

(26) 詳しくは、坂出祥伸氏「中国哲学研究の回顧と展望——通史を中心として」(『東西シノロジー事情』、東方書店、一九九四年)を参考にされたい。